



中村俊定文庫
文庫 18
696



あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
ちるまふはあはれもさうなまはるはあはれ
心はあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ
あはれはあはれもさうなまはるはあはれ



い男松

春

有無菴書芳撰



暖はあはれも梅ふあはれ村のむらり
梅の月そとあはれ家らあはれあはれ
梅あはれ夜のあはれあはれあはれあはれ
梅あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
正月あはれあはれあはれあはれあはれ
梅あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

京 関東
甲斐田 作良
日市川 歌永
日下山 若山
信誼訪 素葉
日上徳 出雲

新雪の梅ふかきしにや白
朝の月物の下はく水の味
宗候

信善光寺

歌仙

おのひ入梅きて遠く夜の町
可忍里

はらうおらら秋月の袖を
忠芳

笛ふらふよ女好の思ふ探りて
作良

物ふるお籠りあけあけ
澄甫

片隅ふ今を月をさし
田村

庄屋のよみ公借るお候
里

はら日代のくろきあはれ
芳

竹ふかきお世の中
良

三條の橋をさしお告ぐら
甫

ゆひもさ緒の底をかひえ
芳

あはれお馬子風あはれ
里

お候はらうお梅を梅
甫

金雲のまをさし月のおふ
良

月の風お探りて
里

市中片布の子まみゆき
 神の赤馬ふいのりり
 杉西のいもむつ
 切きりり
 入里甫

ま柳の晴はらり
 長宗の海より
 ま柳やちほく
 柳をてお
 信善光寺
 甲子田
 全
 百喜
 葛城
 市川
 喜笑

ま柳をてお
 法名く
 山の井
 川の柳
 答
 朝
 答
 答
 野
 信善光寺
 甲子田
 京
 眉卷
 月長
 静菫
 静良
 善光寺
 全
 素子
 料月

維多のよき事しん松の風は
 惚ろよふさきさるもあさう猫の志
 新よりおそせしきもはまの志
 おろろあさきさるもあさう猫の志
 とくさきよふさきさるもあさう猫の志
 世に狂ふもあさきさるもあさう猫の志
 春はあきさきさるもあさう猫の志
 いりよふさきさるもあさう猫の志
 寺のやみかきさるもあさう猫の志

川中島
 市川
 飯田
 甲斐
 茶田
 後全
 何鳥

こちほ入下海雁屋のうすさか
 中を取し中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか
 近うし中さきまの松やか

甲斐野
 日切石
 小原
 武新川岸
 上穂
 小笠原
 浪形
 相模
 春海

春のついでに津波のついでに 蜆の
ふしの瀬子ふとまききの
身もやかり梅もまたのこせ
はらふもあつちぬかりもさかぬ
蒲の英い事さき終て風車
あつちぬかりもさかぬ 夜のこ
二月柳の梢ふとまききの
白柳の本やうき田のよき
さつちぬかりもさかぬ 日
杜若

三

上穂

全

信十

善光寺

全

飯田

喜甫

士貞

有斐

善因

允化

一童

孝三

杜若

梅のついでに津波のついでに 蜆の
ふしの瀬子ふとまききの
身もやかり梅もまたのこせ
はらふもあつちぬかりもさかぬ
蒲の英い事さき終て風車
あつちぬかりもさかぬ 夜のこ
二月柳の梢ふとまききの
白柳の本やうき田のよき
さつちぬかりもさかぬ 日
杜若

曲千住

浪花

二柳

甲東南側

門下山

孝久

千住

悠亭

甲市川

一之

龍彦

六

はるかなる春の空をゆく鳥の鳴
行きやぶるにふさふさな花を
善光寺
甲西南湖 櫻丸
栲冠

夏

朝の青もやうに川うらふさるもく
初よりとせし朝日のいのちをく
ほらきまをんまきぬ浪のこ
時を月の入るにやとくさる
子夜はくさるふさふさなりま
甲新沢 孤山
基段
作良
鏡平
吉原

雨のちやもくさるにやとくさる
月あはれ夢人なりてほらき
人もあはれ夢人なりてほらき
よもやあはれ夢人なりてほらき
ほらきあはれ夢人なりてほらき
くさる一ヶ月あはれ夢人なり
そまやあはれ夢人なりてほらき
業のちやもくさるにやとくさる
業のちやもくさるにやとくさる
日府 安藤
真琴
書山
善光
尾張
仙基
白圓
善光寺
五什
川中島
業中
歌永

卯の宗小片袖ひゆふ山ぬを
藤田 田村
 今野の心言てゆふ海の子
武本店
 一とねちき一とふちりあふり
上毛 幸彦
 杜の心くひ人のまをに
甲斐 朝宇
 杜の心くひ人のまをに
善光寺 故文
 杜の心くひ人のまをに
浪 文北
 杜の心くひ人のまをに
上総 旧国
 杜の心くひ人のまをに
上毛 花嫁
 杜の心くひ人のまをに
上毛 雲屋

海の内くひ人のまをに
上総 雨後
 海の内くひ人のまをに
武今井 子晴
 海の内くひ人のまをに
京 我友
 海の内くひ人のまをに
飯田 白雲
 海の内くひ人のまをに
飯田 玉雲
 海の内くひ人のまをに
上毛 一と
 海の内くひ人のまをに
上毛 如美
 海の内くひ人のまをに
上毛 魚調

清き水も流るる中なる月の
はるききり影はるる秋なる月
花も山も霞もるる春なる月
甲下沢 難沢 京 芳船 定雅

不二橋

石三山也神代の風あふ白く
垣根のしらべも春の影を
清くも二夜ともあき樹の肉
清くも丹陰の影もあふ心
夕涼心りかへく影もあふ心
武川越 其屋原女 九 守石 改凡 静菫 青々

里の山も流るる中なる月の
夕涼心りかへく影もあふ心
夕涼心りかへく影もあふ心
夕涼心りかへく影もあふ心
夕涼心りかへく影もあふ心
信塔名田 切石 京 武備生 柯刺 寺矣 如川 土卯 苞水

秋

如影も流るる中なる月の
夕涼心りかへく影もあふ心
甲下三ノ条 歌永 哥延

陸くまらぬ海をてきり字の秋 幸久
山寺の秋結つてさくら花の秋 武ラコセ 葉散
表里の秋花の秋光の秋 事典
ひらきあつては時をさして夜をさす 尾張 尾張
身も心もあつては秋のひらき 雲山
朝の光は花の光の光の光 武八幡山 雲山
秋の光は花の光の光の光 眞白石 雲山
能くは花の光の光の光の光 乙二
香の光は花の光の光の光の光 十 雲山
甲全可力

奇くも世をさるる所の秋 静菱
雲の光は花の光の光の光 雲水 瓜坊
雲の光は花の光の光の光 西千住 丈山
月よりの光は花の光の光の光 漢甫
妙極の光は花の光の光の光 清平
岸田の光は花の光の光の光 有斐
左出て見れば花の光の光の光 孤舟
夕やしの光は花の光の光の光 尾張 出書
花よりの光は花の光の光の光 一之

何れもくもあふ下あはの標
信房功 榎堂
 陰鶴子かきつりまを海にうつす
仙臺 嵯原
等力 若三
 日さきや志つ心ちり人をさむ
信上田 雲常
 出啼やちりあきさき細月夜
出千住 路川
 馬むやこまきて小るの糸の束
尾長 岳路
 松きみなるおの老まよきくま
 思つた妙さあつぬさうくま
 秋のあふ世々園公なむをり
武本五 静言
 秋の飯の飯きふんたうまう秋
長宗

東の空や門の樓をねむ秋
孫田 詩船
 中水やうき衣の袖ふ秋の風
東南湖 不來
 若き若き人を吹くあまの風
甲平岡 得矣
 神ちややけはるね鳴け秋の風
古市堀 花明
 ふりあまの馬をう弱くあまのそ
下三之条 如雪
 町まや角あひうるあはるる風
上田 賀山
 あはるるあまのねをうつす
如毛
 初をなすおとすけけりあはるる風

秋意深るふもさる秋の暮ら
豊水 莫二
 叶の香を指書あひらり秋のちりり
 秋意ふく雀腰もうたふらり
浅原 有斐
 秋意や影もさるる 釣志のふ
栗津 六助
 秋意もあつてはる 海客は
太田 梅文
 草のそよぶもや 葦のたむけ
武新里 重厚
 喜ぶと海客もや 秋のつとめ
尾張 掌石
 手ふりてはるもさるや 秋のつとめ
尾張 孝喬
 秋意ふくもさる 秋のつとめ
 一蕙

十二

月のみは遠くさるる 浅原 花岳
 月影やとほほしき 志府
 月をさるる 政元
 月影もさるる 小笠原 栞冠
 月影もさるる 飯田 吾妻
 月影もさるる 尾張 紫馬
 月影もさるる 尾張 無因
 月影もさるる 尾張 士朝

初も三日よりの夜の友

雲水

斗入

と信や者の秘をよるの心

基珉

出るるやふれは後へてはり

雲水

真費

山はたやあまをみる人出入

信や倉

信庵

人のしよ長おのつらきあはれ

京

信杖

老樂のまててふらう秋の雲

大波

事なほはるるあまをみる

三味線のちよまやん好の月

其成

ほの月日おみうらふはきり

十三

其涯

彩歌のまをわけておまをみる

信上信展

英戸

海もなほはるる雀の羽

尾張

臥央

砂のまをみるのまをみる

武毛呂

るる里

客もあつたまをみる

碩布

手もあつたまをみる

五芳

はるるまをみる

其夜

冬

初日や月代澄くまをみる

の影

夕顔のまじりふかり終り初時

飯田

梅好

時をさうしつる月をさる松の障

上菘

左輔

とみきおあめりたまそふ樹をさう

一之

山里ふ時をたかたあうりや

信林

因子

志くくや銀をさきと舟の中

政厄

袖力をさきと舟のたふら

吉内

連をさきと舟のたふら

巴育

標をさきと舟のたふら

静菘

とみきおあめりたまそふ樹をさう

十四

裏山

泣くくく人の涙をさう

飯田

菊二

枯葉ふ月い無風く明き方

京

夫左

風をさきと舟のたふら

秋田

五明

我れおあめりたまそふ樹をさう

飯田

静良

本わさきと舟のたふら

詠訪

以三

風をさきと舟のたふら

荳園

片をさきと舟のたふら

作良

満月をさきと舟のたふら

鏡平

味をさきと舟のたふら

立芳

秋の明のよきとて座の強衝
 琴強て担ふとせんおのたま
 水鏡の力能ははるるを
 命あゝとの涙おのたま
 ちとくとあつきののち枝の
 冬も枯れても志何一枯と月
 竹とて人よをけりてきとる
 子葉の元や光琳の筆もとぬ
 ありの元やのしとくともふ
 十五

甲斐 赤原

仙臺 石牙

信茂野 汀砂

上枝 丈嘯

飯田 山舉

奥本宮 蕉雨

武備生 冥

飯田 柳翠

忍阿

秋岸や空周らむとて
 浮世をく入江の海へを
 水仙や人目を射る
 水仙の風邪はさか
 水鏡の如きより建て
 枯かたのちの流の
 秋を枯ちもや海
 ちとくとあつきの
 ちとくとあつきの

等刀 早巴

三車

信生寺 志

飯田 伯先

可白

基

洋南

市川 魯山

幸又
 基根
 善人
 柗枝
 巨桐
 杜原
 葛三

諏訪湖
 舟はて馬業をそと氷う那
 十六
 鳥語

飯野 梅五
 飯田 信風
 善光寺 路八
 山ノ神 桑明
 善光寺 葉花
 仙臺 左翠
 飯田 柗菜
 京 雲三
 百池

善光寺

冬の月くさくさおもて消ゆる
松のうしろさうふさうしつ夜の人
寺の庭く陰のうらみさうわらう
有明の月より寺のうらみさうわらう

冬仙

不夜の月くさくさおもて消ゆる
松のうしろさうふさうしつ夜の人
寺の庭く陰のうらみさうわらう
有明の月より寺のうらみさうわらう

十七

あつたはうり蛤はむく
あつた今い時入る月影を
あつたうらみ山をさうわらう
あつた人のうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう四月朔日
あつたうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう
あつたうらみさうわらう

川のほとりにおもひの草を細くつむいで
よまらへておもひを結んでおもひ
村のむらじまをさへ入るるも
いつかたつとつた早稲のついで
咲きもあはれつとつとあはれつ
さきとつとつと身うたつとつと
中法とつとつとつとつとつとつと
この言はれぬ女田五人
君と代のおもひのおもひとつとつと
十六

芳 兩 伯 芳 兩 伯 風 紅 芳

つとつとつとつとつとつとつとつと
雲の影のつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
女とつとつとつとつとつとつとつと
中法とつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつと

芳 兩 伯 芳 兩 伯 芳 兩 伯

響る家の海まもあつて刀は
 とはつちまもあつておるる
 石流の布家の社におおあつて
 ちしほくやふおのきをいひ
 心よりいふ極もつ心のたぐ
 心はこほりも融和を極

伯 兩 芳 伯 芳 兩

郊行途中の遠句

古松亭

柳庄

雲をたつたあはれをいひて
 たんこもも南を英とて
 花の中を美人の影おぼしめし
 ちりくおぼしめし
 月と志終る昔代の海のすけを
 心よりいふ極もつ心のたぐ

希言 全 庄 全 言

二階のつまはたの夕紅
あはれはつゆのまゝ嫁の時
おひらき子箱の底ふたふた
百目有ひ足は縁の糸月
いかにんこ園もウラス又冬園
いらそふちりぬ好と好い
三日月の糸の耳は片身の
ちよつとをよこ結のち有
あまのこむらにをひの源公連

二十

帯のよこをよこ結のち有
うらむのまゝにぬむら花入
踏おひらき子箱の底ふたふた
好後ちりぬ結く
あまのこむらにをひの源公連
おひらき子箱の底ふたふた
百目有ひ足は縁の糸月
いかにんこ園もウラス又冬園
いらそふちりぬ好と好い
三日月の糸の耳は片身の
ちよつとをよこ結のち有
あまのこむらにをひの源公連

此の如く我が家の名はなんじの
 御の如くなんじの御を頼み
 借の如くりかたの御を頼み
 侍候の如くりかたの御を頼み
 唐神を奉るの如く押す
 この如くりかたの御を頼み
 茶の如くりかたの御を頼み
 唐の如くりかたの御を頼み
 おの如くりかたの御を頼み
 全 庄 言 全 庄 言 全 庄 言 全 庄 言

全

此の如くりかたの御を頼み
 御の如くりかたの御を頼み
 借の如くりかたの御を頼み
 侍候の如くりかたの御を頼み
 唐神を奉るの如く押す
 この如くりかたの御を頼み
 茶の如くりかたの御を頼み
 唐の如くりかたの御を頼み
 おの如くりかたの御を頼み
 全 庄 言 全 庄 言 全 庄 言 全 庄 言

雨吟

竹柱て雀の附ふさあう

蘭二

あまの草月の白さうさう

五芳

小の雲うさあまうさあう

二

しらうさあまうさあう

芳

村のふたりの水うさあう

二

なまの(まの)うさあう

芳

花のうさあまうさあう

二

三

刀の抜きさうあまう

芳

波のうさあまうさあう

二

十夜のうさあまうさあう

芳

竹のうさあまうさあう

全

まのうさあまうさあう

二

竹のうさあまうさあう

芳

まのうさあまうさあう

二

竹のうさあまうさあう

芳

竹のうさあまうさあう

二

如く厚く白く定むる白の色
二 芳

有無の事

五芳

物類の如く定めしむる物
五芳
出づる花の如く定めしむる
五芳
古の如く定めしむる物
五芳
いづれも痛みの如く定めしむる
五芳

廿三

とていふを夜きよきとていふ
三 芳
押さへし花の如く定めしむる
三 芳
或は花の如く定めしむる物
三 芳
花の如く定めしむる物
三 芳
花の如く定めしむる物
三 芳
花の如く定めしむる物
三 芳
花の如く定めしむる物
三 芳

之 所 居 之 地 乃 是 也
水 之 名 曰 海 水 乎
所 以 地 之 名 曰 海 水 乎
海 水 之 名 曰 海 水 乎
海 水 之 名 曰 海 水 乎
三 兆 芳 三

完 及 九 年
丁 巳 癸 卯

昔 終

